慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	牡丹考：『聊斎志異』異類譚札記(一)
Sub Title	Fairies of peony in Liaozhai Zhiyi
Author	八木, 章好(Yagi, Akiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.65, (1994. 3) ,p.310- 330
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	檜谷昭彦, 佐藤一郎両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00650001-0310

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

牡丹考

――『聊斎志異』異類譚札記(一)――

八木章好

一

清・蒲松齢（一六四〇―一七一五）の怪異小説集『聊斎志異』には、異類に関わる故事が数多く含まれる。異類の故事の大半は、人間の男と異類の女との恋愛・婚姻を扱うものであり、花妖譚はいずれもこの類型に属する。『聊斎志異』の花妖譚には、菊の精を描いた「黄英」（巻十一）、牡丹の精を描いた「葛巾」（巻十）と「香玉」（巻十一）の計三篇がある。[1] 全巻で五百篇に近い作品総数の中での三篇という数は、異類の中で最も多い狐の故事が八十余篇を数えるのに比べれば、ごくわずかな篇数であり、数量の上では、花妖譚は『聊斎志異』の中の主要なものとは言えない。しかしながら、三篇はいずれも、ほとんどの選注本・抄訳本の類に採録されている代表作であり、異類を詩的に美しく描く『聊斎志異』の本領を存分に発揮した作品であると言える。

本論では、すでに詳しい論考[2]のある「黄英」については補助的材料として扱う範囲にとどめ、主に牡丹の二篇、「葛巾」

と「香玉」を中心に考察を進めていきたいと思う。

二

牡丹は、明・李時珍『本草綱目』の記載では、「鼠姑」「鹿韭」「百両金」「木芍薬」「花王」などの別名を持つとされるが、これらの別名も含めて、牡丹の名は、『詩経』『楚辞』『文選』など六朝以前の主立った詩文集の中に現われない。牡丹は、古くは薬用の植物であり、観賞用の花としての歴史は比較的浅い。したがって、文学の中で詩に歌われるようになるのも遅れるのである。宋・欧陽修『洛陽牡丹記』「花釈名」に、

牡丹は初め文字に載さず。唯だ薬を以て本草に載す。然れども花中に於いては高第為らず。大抵丹・延已西及び褒斜道中に尤も多し。荊棘と異なること無し。土人は皆取りて以て薪と為す。

とあるように、古くは『神農本草経』に薬としての記載があるのみで、花としては高級なものではなく、多く産する地では、その価値は、いばら同然であったという。また、宋・鄭樵『通志』「昆蟲草木略」に、

牡丹は本名無し。芍薬に依りて名を得。故に其の初め木芍薬と曰う。古くは亦聞くこと無し。唐に至りて始めて著わる。

とあるように、古くは名もなく、芍薬に名を仮りた目立たない存在であったことがわかる。

観賞用の花として牡丹が広く人々に知られ、愛好されるようになるのは、唐代に入ってからのことである。そのにわかな流行の熱狂ぶりは、唐・李肇『唐国史補』に、

京城の貴遊、牡丹を尚ぶこと三十余年なり。春暮毎に、車馬は狂うが若く、耽玩せざるを以て恥と為す。

とあり、また、唐・康駢『劇談録』に、

京国花卉の晨、尤も牡丹を以て上と為す。仏宇・道観に至りては、遊覧する者、経歴せざること罕なり。

とあるように、都の人々は牡丹に魅了され、特に王公貴族の間では、高値を厭わず、競って牡丹を買い求めることが、一種のステイタスシンボルとなっていたようである。こうした情況は、唐・王叡「牡丹」詩に、

牡丹妖艶乱人心　牡丹妖艶にして人心を乱し
一国如狂不惜金　一国狂うが如く金を惜しまず

また、唐・白居易「牡丹芳」詩に、

花開花落二十日　花開き花落つること二十日
一城之人皆若狂　一城の人皆狂うが若し

などとある詩句からもうかがえる。

唐代以降、牡丹は頻繁に詩に詠まれるようになるが、そのさきがけとなったのが李白の「清平調詞」三首である。その成立の背景には、宋・楽史『楊太真外伝』に見える有名な逸話がある。開元年間、宮中では牡丹を尊んだ。花見の宴の時、楊貴妃をかたわらにした玄宗は、李白に命じて新しい歌詞を作らせ、それを李亀年に歌わせたという。勅旨を受けた時、李白は長安の町で酔いつぶれていたが、御前に連れ出されると、たちどころに三首を作って献上したとされる。その第二首に、

一枝紅艶露凝香　一枝の紅艶　露　香りを凝らす
雲雨巫山枉断腸　雲雨　巫山　枉しく断腸

と歌い、傾国の美女楊貴妃のあでやかさを牡丹の花にたとえている。

こうして一躍天下第一の名花となった牡丹は、唐詩において最大級の賛辞をもって歌われるようになる。皮日休の「牡丹」詩に、

落尽残紅始吐芳　残紅落ち尽くして　始めて芳を吐く
佳名喚作百花王　佳名　喚びて百花の王と作す
競誇天下無双艶　競い誇る　天下無双の艶
独占人間第一香　独り占む　人間第一の香り

とあるように、牡丹は衆花とは隔絶した地位を誇るようになる。羅隠の「牡丹」詩に、

芍薬与君為近侍　芍薬は君の与に近侍と為る
芙蓉何処避芳塵　芙蓉は何れの処にか芳塵を避く

とあるように、芍薬や芙蓉の追随を許さず、さらに白居易の「牡丹芳」詩では、

仙人琪樹白無色　仙人の琪樹は白くして色無く
王母桃花小不香　王母の桃花は小にして香しからず

とあり、仙界の玉樹や西王母の桃さえも退ける。

宋代に至ると、洛陽の牡丹が天下一ともてはやされるようになる。欧陽修『洛陽牡丹記』「花品敍」に、

牡丹は丹州・延州に出で、東は青州に出で、南も亦越州に出づ。而して洛陽に出づる者、今は天下第一と為す。

とある。また、同「風俗記」に、

洛陽の俗、大抵花を好む。春時、城中は貴賤と無く皆花を挿す。負担者と雖ども亦然り。花開く時、士庶競いて遊遨を為す。往往にして古寺廃宅の池台有りし処に於いて市を為し、幷せて幄帟を張り、笙歌の声相聞こゆ。

とあるように、唐代ではまだ王公貴族でなければ買い求められなかった牡丹の花が、宋代には大衆化し、牡丹を愛好する人々の層が拡がり、牡丹の花は洛陽の春を彩る風物詩となった。洛陽の人々によって牡丹は熱烈に愛好され、他の草花とは全く異なる別格の扱いをされるようになる。同「花品敘」に、

洛陽は亦黄芍薬・緋桃・瑞蓮・千葉李・紅郁李の類有り、皆他に出づる者に減らず。而れども洛人は甚しくは惜しまず、之を果子花と謂い、某の花、某の花と曰う。牡丹に至りては則ち名づけず、直だ花と曰う。其の意に謂えらく、天下の真の花は独り牡丹のみ、其の名の著わるる、牡丹と曰うを仮りずして知るべし、と。

とあるように、洛陽の人々にとっては牡丹こそが花であり、花と言えば牡丹を指した。桃や李の花が、果実に付属した花であるのと異なり、牡丹は、花卉を観賞するための純然たる花であった。

このようにして、六朝以前は全く無名であった牡丹が、唐代から宋代にかけて爆発的な人気を呼んだ。しかし、そのあまりに熱狂的な流行と、牡丹自身の持つあまりのあでやかさゆえに、中唐以降、すでにこれに対する反発もしばしば見られるようになる。先に引いた白居易の「牡丹芳」詩は、前半は牡丹の豊艶な美しさを称えるが、後半は一転して、その魅力に惑わされた世相の流弊を諷諭し、

我願暫求造化力　我願う　暫く造化の力を求めて
減却牡丹妖艶色　牡丹の妖艶の色を減却し
少廻卿士愛花心　少しく卿士の花を愛するの心を廻して

同似吾君憂稼穡　同じく吾が君の稼穡を憂うるに似しめんことを

と結ぶ。また、同じ白居易の「秦中吟」十首の一つ「買花」詩も、牡丹の花に狂った時流を諷し、一叢の値が中流家庭十戸分の税金に相当するような牡丹を競って買い求める豪族の奢侈を嘆く。

牡丹を愛好する世の風潮を逆手に取って書かれたのが、宋・周敦頤の有名な「愛蓮説」である。この文章では、蓮・菊・牡丹が対比的に述べられている。

予謂えらく、菊は花の隠逸なる者なり、牡丹は花の富貴なる者なり、蓮は花の君子なる者なり、と。噫、菊を之れ愛するは、陶の後に聞く有ること鮮なし。蓮を之れ愛するは、予に同じき者は何人ぞや。牡丹を之れ愛するは、宜なるかな衆きこと。

この文章は、清廉潔白で、道徳的品性の高い蓮の如き人間が理想的な人間のあり方であることを説く。作者は、蓮を最高としながら、菊に対しても、これに次ぐ高い評価を与えている。一方、牡丹は、ことごとく蓮とは対照的であり、蓮の引き立て役として使われている。ここでは、世人の皆が追い求める富貴は、世俗的なものとして負価の価値観が付与されている。

しかしながら、この文章は、富貴を重んじない儒者の立場で書かれたものであり、一般の通念としては、唐代から清代に至るまで、牡丹はつねに百花第一の花として、人々にもてはやされてきた。唐代初期に編纂された『芸文類聚』には項目すら立てられていなかった牡丹が、唐代中期にはすでに名称の本家である芍薬を凌ぎ、その地位は以後も変わることなく、明の『本草綱目』でも、牡丹を群花第一の「花王」、芍薬を「花相」（花の宰相）とし、また、清の『淵鑑類涵』では、牡丹を「花部」の筆頭に挙げている。なお、宋・蘇軾「牡丹記敍」に、

此の花、世に重んぜられて三百余年。妖を窮め麗を極め、以て天下の観美を擅にす。而して近歳尤も復た変態百出し、務めて新奇を為し、以て時好を追逐せる者、紀すに勝うべからず。

とあるように、早くから品種改良が盛んに行われており、牡丹の品種は時代を経るにつれて増加し、明の『群芳譜』ではすでに百八十余種を数え、清の『広群芳譜』では、その上に更に約二百種を増補している。

牡丹の花は、大型で量感があり、色彩のバラエティにも富む鮮美な花であるゆえに、その印象は、華麗で艶っぽく、豊満で力強いものがある。「錦袍紅」「慶天香」「祥雲紅」「七宝冠」「太平楼閣」「翠紅妝」「玉楼春」「繡衣紅」「状元紅」「金屋嬌」「富貴紅」「八艶妝」「粉西施」「酔楊妃」「臙脂楼」……こうした牡丹の品種名からもうかがえるように、牡丹の象徴するものは、世俗的な意味での幸福、すなわち、富貴・吉祥・繁栄・太平であり、女性の美にたとえれば、他を圧倒するあでやかな美しさである。こうした豪奢で派手な美しさは、原色を好んで用いる中国の宮殿・寺院などの建築を考え合わせても察することができるように、中国人の美的趣味によく合ったものであり、牡丹が「花王」「国色天香」と呼ばれ、人々に珍重されてきた所以が容易に理解できるのである。

三

さて、こうした牡丹の印象をふまえて、『聊斎志異』の中の牡丹の故事二篇を具体的に分析していくことにする。はじめに、「葛巾」の梗概を記そう。

洛陽の常大用は、牡丹のマニアであった。ある時、曹州での旅先の庭園で、仙女の如く美しい女性葛巾と出会う。男は女に惚れ込み、やがて女も男の情に応え、二人はあいびきを重ねた末、駆け落ちする。二人は結婚し、葛巾の

義妹玉版も常大用の弟と夫婦となり、二年後、姉妹ともそれぞれ男の子を産む。ところが、女の身元に不審を抱いた常大用が、再び曹州へ出かけて調べたところ、女が牡丹の精であることが判明する。素性を疑われた葛巾は、玉版と共に男の前から姿を消す。

まず、主人公の花妖の名前であり、作品の篇名でもある「葛巾」は、『広群芳譜』にも見える紫の牡丹の品種名「葛巾紫」[3]によるものであり、その義妹の名「玉版」も、やはり白い牡丹の品種名「玉版白」[4]によるものである。また、二人は魏姓を名乗るが、これは「魏花」[5]にちなんだものであろう。「姚黄」「左花」などのように、牡丹の品種名は、その栽培をはじめた氏族の姓に由来するものがある。「魏花」（「魏紫」あるいは「魏紅」とも言う）もその例であり、「花后」（花の皇后）と称され、最も高価な品種の一つであった。

では、作品の冒頭を見てみよう。

常大用、洛人、癖好牡丹。聞曹州牡丹甲斉魯、心向往之。適以他事如曹、因仮搢紳之園居焉。

常大用は洛陽の人で、牡丹のマニアであった。曹州の牡丹は山東地方で第一だという話を聞いて、かねてあこがれていた。たまたま別の用事があって曹州へ出かけることになった。そこで、貴紳の庭園内に泊めてもらっていた。

この短い冒頭の部分で、すでに多くのことが語られている。主人公の常大用は洛陽の人間という設定になっているが、前章でも述べたように、洛陽は、唐代から宋代にかけて、牡丹の栽培の中心地であり、牡丹は「洛陽花」とも呼ばれる。そして、常大用は曹州（今の山東省菏沢県）へ出かけるが、曹州もまた牡丹と関係が深い。牡丹の主要産地は時代によって移り変わっている。唐代では、はじめは都長安で流行するが、のちに洛陽へ中心が移り、宋代にまで至る。南宋では、彭州（今の四川省彭県）、明代では、亳州（今の安徽省亳県）で盛んになる。そして、清代に至ると、曹州が全国随

一の牡丹の産地となり、あらゆる珍種がここで見ることができるようになる。清・余鵬年『曹州牡丹譜』に、

曹州の園戸、花を種うるは、黍粟を種うるが如し。動もすれば頃を以て計り、東郭二十里、蓋し畦を連ね畛を接するなり。

と記述があり、曹州における牡丹栽培の盛況を伝える。このように、『聊斎志異』の中の人名や地名など固有名詞は、往々にして特定の背景を担っており、任意に命名されたものではない場合が多い。

また、ここで常大用は「癖好牡丹」と記されているが、「癖」とは、病的なほどにある一つの物事に夢中になる偏った嗜好をいう言葉であり、この次の場面で、常大用の常軌を逸した牡丹好きのさまが描写される。

時方二月、牡丹未華。惟徘徊園中、目注句萌、以望其拆、作懐牡丹詩百絶。未幾、花漸含苞、而資斧将匱、尋典春衣、流連忘返。

時はちょうど二月（旧暦）で、牡丹はまだ花を咲かせていなかった。ただ庭園の中をぶらぶら歩き回って、若芽をながめては、それが開くのが待ち遠しく、「牡丹を懐う詩」絶句百首を作ったりしていた。しばらくたつと、ようやく花のつぼみが見られるようになったが、滞在の旅費がなくなりそうになったので、春着を質に入れて、そこに居続け、もう帰ることなど忘れてしまっていた。

これに続いて、常大用と葛巾の出会いとなるのであるが、二人の出会いは、一見偶然のようであって、実は必然的なものとして描かれている。つまり、常大用の牡丹に対する異常なまでの熱情が、本人の知らぬ間に、その花の精を彼の前に引っ張り出してきているのである。「黄英」の場合も、やはり主人公の馬子才に菊癖があり、それがゆえに、菊の姉弟に出会う。こうした出会いの仕組みは、「黄英」に付せられた馮鎮巒の評語が、端的に語る。

物は好む所に聚まる。書に癖する者には鄉嬛畢く集まり、友に癖する者には群賢畢く至り、花に癖する者には百卉繽紛たり。馬子才の花精を感動せしむは以有るなり。

このように、真にそれを好む男の面前に、そのものの精が姿を現わし、男の情に応えるが如く、ドラマを展開していくというパターンは、花妖の故事のみだけでなく、「鴿異」（巻六）の鳩の精、「石清虚」（巻十一）の石の精、「書痴」（巻十一）の書中の美人など、『聊斎志異』の中にしばしば見られるものである。

では、常大用と葛巾の出会いの場面を、次に見てみよう。

一日、凌晨趨花所、則一女郎及老嫗在焉。疑是貴家宅眷、亦遂遄返。暮而往、又見之、従容避去。微窺之、宮妝艶絶。眩迷之中、忽転一想、此必仙人、世上豈有此女子乎。

ある日、朝早く花のある場所へ行ってみると、一人の若い娘と老婦人がそこにいた。身分の高い家柄の人だろうと思い、急いで引き返した。夕方になってから行ってみると、また二人を見かけたので、ゆっくりと避けて通った。ちらりとのぞいてみると、宮女の装いで、なんともあでやかであった。目のくらむ思いでうっとりとなりながら、ふと考えた。これはきっと仙人だ。この世にこのような女性がいるはずがない！

ここでは、女の美しさを「宮妝艶絶」と形容するが、これは正に牡丹の美しさの形容そのものである。かすかな清香を漂わせる梅や菊などとは異なり、牡丹は、「眩迷」させんばかりの強い衝撃を伴う美しさで人を魅惑する。この場面を含めて、作品中では、しばしば葛巾を仙女にたとえるが、これもやはり牡丹のイメージとつながるものであり、牡丹には、「玉天仙」「玉仙妝」「百葉仙人」など、「仙」と名のつく品種が少なくない。

また、牡丹の象徴する女性美は、単なる外見的な美しさだけでなく、容貌に加えて、家柄の良さや優れた才能も、時

として問題にされる。つまり、才色兼備で豊満な、万能型の女性の美しさが要求されるのである。ここでも、葛巾の姿は、常大用の目には「貴家宅眷」の女性として映る。葛巾の性格も、実に牡丹の精にふさわしく描かれている。男に対して自分からあいびきを指図したり、駆け落ちの手筈を整えたり、男の方よりむしろ積極的に、大胆に行動している。大器と玉版の婚礼も全て葛巾が提案し、事を運んでおり、また、強盗に襲われた際にも、葛巾の巧妙な弁舌で難を逃れている。このように、作品の随所で、葛巾の奔放なまでの積極性、力強さ、聰明さ、そして毅然たる風格が示されている。これらは、いずれも、他の花では演じ切れない牡丹の精ならではの性格と言えよう。

もう一つ、花妖譚においてさらに特徴的なことは、その女体から発する芳香の描写である。

女郎近曳之、忽聞異香竟体、即以手握玉腕而起、指膚軟膩、使人骨節欲酥。

女が常大用に近寄って彼を引き起こすと、たちまち女のからだ全体から異様な芳香がにおってきた。すぐにその玉のような腕を握って立ち上がったが、その手の肌は、柔らかくなめらかで、人の骨の節々をとろけさせるようだった。

幸寂無人、入則女郎兀坐……遂狎抱之。纖腰盈掬、吹気如蘭。

幸いに、しんとして誰もいなかったので、女の部屋に入っていくと、女は一人ぽつんと坐っていた。……そこで女に抱きついた。細い腰は手のひらにも入るくらいで、吐く息は蘭のように芳しかった。

攬体入懐、代解裙結。玉肌乍露、熱香四流、偎抱之間、覚鼻息汗熏、無気不馥。

女の体に手をかけ、引き寄せて抱くと、女の下袴の結び紐を解いてやった。玉の肌がさっとあらわれると、熱い香りがあたりに流れた。抱きかかえていると、息といい、汗といい、芳香を放たぬものはなかった。

再三繰り返される女の芳香の描写は、言うまでもなく、花卉の香りによるものであるが、とりわけ牡丹は香りが強く、中でも、紫の牡丹は最も強烈な香りを放つという。(6)

また、上に挙げた芳香の描写の中には、つやのあるなめらかな肌の感触や、女の息づかいなど、きわめて官能的な描写が含まれており、エロチックでさえある。男の迫り方も露骨であり、同じ花妖譚でも、こうした芳香の描写や煽情的な描写が全く見られない「黄英」とは異なる点である。これは、牡丹と菊のイメージの相違によるものに他ならない。菊の清楚さが高潔なイメージを与えているのに比べて、牡丹は、そのあでやかさゆえに、肉感的な存在であり、男とも容易に濃厚な関係を持ちやすいのである。

四

次に、「香玉」を見ていくことにしよう。

膠州の黄生は、労山の下清宮（道教の寺）に別荘を造営し、書物を読んでいた。ある日、白い服の女香玉と、赤い服の女絳雪に出会う。二人はそれぞれ白牡丹と耐冬の精であった。男は香玉と恋仲になるが、のちに白牡丹が人に掘り返されてしまい、香玉は泣く泣く男のもとから去っていく。その後、黄生は絳雪を相手に時を過ごす。ところが、しばらくたつと、黄生の至情に感じた花神が、香玉を再び寺へ降すことになり、黄生と香玉は再会し、もとのように情を交す。のち、男が病気で死ぬと、男は自らの予言通り、牡丹に化して芽を吹く。しかし、その牡丹はやがて伐られてしまい、すると白牡丹と耐冬も間もなく枯れてしまった。

前章で「葛巾」について分析したことは、同じ牡丹の故事である「香玉」についても、基本的には、ほぼあてはまる。

容姿については、

未幾、女郎又偕一紅裳者来、遙望之、艶麗双絶。

間もなく、女はもう一人の赤い服を着た女を伴ってやって来た。遠くから見ると、二人とも途方もなく艶麗である。

とあり、芳香についても、

二女驚奔、袖裙飄拂、香気洋溢。

二人の女は驚いて逃げていった。袖や裾がひらひらと舞い、芳しい香りがあたりに満ちた。

とある。また、香玉は、黄生と詩の応酬をし、黄生に、

卿秀外恵中、令人愛而忘死。

あなたは容貌が美しく、心もまた慧(さと)い方だ。人を死ぬほど夢中にさせる。

と言わしめているように、外見の美しさだけでなく、内面的にも優れていることが示されている。

「香玉」で特に際立った点は、色彩の多様性である。香玉が登場する場面では、

一日、自窗中見女郎、素衣掩映花間。

ある日、窓から見ると、若い女が、まっ白い服を着て、花々の間に照り映えていた。

と、色とりどりの花々の中に鮮やかな純白色を浮かび出させている。「香玉」という名は、『広群芳譜』等に牡丹の品種名としての記載はないが、「玉」の字から連想する色は、言うまでもなく、白である。また、冬に赤い花を咲かせる耐冬(7)の木の精には「絳雪」(絳は濃い赤色)と名づけ、赤い衣裳で登場させている。さらに、主人公の書生の姓は「黄」であり、また、寺へやって来て白牡丹を掘り返していった男の姓は「藍」である。「葛巾」でも、葛巾の紫、玉版の白が用い

られているが、「香玉」においては、白・赤・黄・青が配色されており、より意図的に色彩を多様化させ、花妖譚にふさわしい作品全体の視覚的イメージ効果をねらったあとがうかがえる。前述のように、牡丹は盛んに品種改良が行われており、赤・白・黄・ピンク・緑・紫・黒（暗紫色）など、花卉の色はバラエティに富む。同じ花妖譚でも、一般的イメージの上では黄色と決まっている菊の精には、こうした変化は見られようがない。

「葛巾」と同様に、「香玉」においても、花妖を描写する際に、植物としての牡丹の属性や印象が、作品の所々に活かされている。細かい部分でも、例えば、香玉が再び自分の芽を吹かせるために、黄生に対して、

君以白歙屑、少雑硫黄、日酧妾一杯水。

かがみぐさの粉に硫黄を少しまぜて水にとかし、毎日一杯ずつ私にそそいで下さい。

と語る部分は、『広群芳譜』にも記載されている実際の牡丹の栽培法[8]にのっとったセリフである。花妖以外でも、例えば、「鴿異」（巻六）の冒頭で鳩の品種名を羅列しているように、異類の故事を扱う際に、その異類に関するかなり細かい知識まで作品の中に運用しようとする傾向は、『聊斎志異』の一つの特色であると言えよう。

さて、故事の主題に着目すると、「香玉」の主題は、「情」の一語に尽きる。篇末の「異史氏曰」に、

情之至者、鬼神可通。花以鬼従、而人以魂寄、非其結於情者深耶。

情がこの上なく深くなると、鬼神にも通じる。花（香玉）は幽霊となって人につれ添い、人（黄生）は死んでもその魂を花に寄せたのは、その凝り固まった情の深さによるものではなかろうか。

とあり、作品の随所で黄生の情痴ぶりが示される。死んで自ら牡丹に化すことを予言する際のセリフに、

此我生期、非死期也、何哀為。

これは私が生まれる時であって、死ぬ時ではないのだ。何を悲しむことがあろうか。

とあるように、黄生の情は、生死を超越した一途なものとして描かれる。そして、香玉もまた、

絳姉性殊落落、不似妾情痴也。

絳雪姉さんは、気性がとてもさっぱりしていて、私みたいに情に溺れる人ではありません。

と、情痴を自認する。これは、男の情に感じ、女も情を以て情に報いるという恋愛故事の常套的パターンを踏襲したものである。また、花神を感動せしめて香玉を再生させたのも黄生の情であった。人間の純粋な熱情や一途な祈願が天に通じ、異変や奇跡を起こすという話は、怪異小説や民間伝承によく見られる。なお、黄生は、香玉と絳雪の二人の女性を相手にするが、一人の男に複数の女が関係するのは、中国の旧社会の風習を反映したもので、中国の小説には珍しくない。『聊斎志異』の異類譚においても、男は異類の女と関係を持つ前にすでに人間の妻がいるという場合が多い。まして、黄生は、香玉を「愛妻」、絳雪を「良友」と明確に区別しており、絳雪の存在は、黄生の香玉に対する痴情の純度を損うものではない。

情を主題とする点では、「葛巾」も同様である。花妖譚の中でも、牡丹の精は、濃密な情を演じやすい。菊の高潔な印象がまさって、女性としての情感をほとんど見せない「黄英」とは対照的である。「葛巾」と「香玉」は、同じ素材を用いて、同じ主題に沿って書かれたものであり、両篇は明らかに姉妹篇として作られている。しかし、似たような作品の繰り返しになるのを避けるため、作者が意図的に両者の間に変化を持たせたあともうかがえる。同じ情痴と言っても、「葛巾」の常大用と「香玉」の黄生とでは、ややタイプが異なる。常大用の場合は、もともと牡丹に対する癖があって、それが葛巾と出会う契機となる。女の調合した毒をあおる場面など、いかにも情痴ではあるが、結末で、女の素性に疑

念を抱いて破綻を招いているように、闊達さに欠け、情に徹し切れていない。一方、黄生には牡丹癖はなく、香玉との出会いは、黄生の詩才によるものとなっている。そして最後には、死んで牡丹と化し、香玉と永遠に運命を共にする。花妖の描写も、葛巾の方は、その醸し出すイメージが牡丹そのままのイメージであるのに比べて、香玉は、花妖としての牡丹のイメージがやや稀薄であり、作者の意図は、花妖を描くことより、むしろ男女の情を描き上げることにある。一読した印象も、「香玉」の方が、単なる異類譚から一歩踏み出て、文学作品として、より精錬された感がある。

五

『聊斎志異』の異類譚では、異類の生物としての属性や印象、あるいは民俗信仰上の象徴性を巧みに利用して物語を構成している。作者は、作品のはじめから、再三、手かえ品かえ、女が異類であることを暗示する。読み手は、それとすぐにわかるのであるが、ただ作中の男だけがなかなか気が付かない。これはちょうど『白蛇伝』を見る観衆が、白素貞の正体をなかなか悟らない許仙にやきもきする心情に似通ったものであり、『聊斎志異』の異類譚では、こうした芝居的効果が計算されている。

ところで、植物を志怪の題材に取り込むことは、蒲松齢の創案によるものではない。草木・花卉の怪異譚は古くからある。それらは、木から血が出たり、人間の形をした草が生えたり、冬に梨の花が咲いたりといった怪異現象を記すものが主で、その多くは、吉凶の予兆や歴史的事件の前触れとして扱われている。(9)

花妖が美女の姿を借りて現われる話も古くからすでに見られる。例えば、『集異記』に見える百合の精の話から、男と花妖の出会いの場面を引用すると、

忽ち白衣の美女に逢う。年十五、六。姿貌絶異なり。客、其の来たるところを詢うに、笑い応えて曰く、家は山前に在り、と。客、心に山前に是の子無きを知るも、亦未だ妖たりと疑わず。但だ心に殊に尤しと以い、其の観視を貪り、且つ挑み且つ悦ぶ。因りて誘いて室に致り、歓を交し義を結び、情款甚だ密なり。

とあるように、花妖はすでに男の欲望の対象として現われている。

また、『酉陽雑俎』には、花の精たちを風から守った崔玄微という男の話がある。これは、『醒世恒言』の「灌花叟晩逢仙女」の入話にも用いられている故事であるが、ここでは、楊・李・桃・石榴の精が登場する。それぞれ、姓を楊・李・陶（「桃」と同音）・石と名乗り、身にまとっている衣裳の色も、それぞれ、緑・白・紅・緋というように、植物の色と合わせている。また、花妖たちの宴の場面には、

色皆殊絶、満座芬芳たり、馥馥として人を襲う。

と、芳香の描写も見られる。なお、『太平広記』（巻四百十六）では、この話に次のような別の話が付加されている。

尊賢坊の田弘正宅、中門外に紫牡丹の樹と成れる有り。花発くこと千余朶。花の盛んなる時、月夜の毎に、小人五、六、長尺余なるもの有りて、花上に遊ぶ。此の如きこと七、八年。人将に之を掩わんとすれば、輙ち所在を失う。

このように、花の妖精を小人とする発想は、「香玉」にも、

少時已開、花大始盤、儼然有小美人坐蘂中、裁三四指許、転瞬飄然欲下、則香玉也。しばらくすると花が開き、その花は盆のように大きく、中にはっきりと小さな美人がいて、蕊の間に坐っていた。わずか三、四寸ばかりで、またたく間にひらりと地面に降りると、それは香玉であった。

とある。

なお、「香玉」については、よく似た故事が、『労山叢拾』[10]に見える。

上清宮の北、洞有りて煙霞洞と曰う。……洞前に一白牡丹あり、巨逾罔抱、数百年の物なり。相伝うるに、前明、即墨の藍侍郎なる者、其の地に游び、花を見て之を悦び、園中に移植せんと擬りて未だ言わざるなり。是の夜、道人、一白衣の女子を夢み、来たりて別れて曰く、余今当に暫く此を別るるべし。某年月日に至れば再び来たらん、と。明に及び、藍宦、人を遣わして柬を持し来たりて此の花を取らしむ。道人之を異とし、夢中の年月を壁に志す。期に至りて、道人又女子を夢み、来たりて曰く、余今帰れり、と。暁に起き趨り視れば、則ち旧花を植えし処、果たして荅苞怒発す。亟かに奔り藍に告ぐ。園中に趨り之を視れば、則ち移植せし所の者、果たして槁死せり。

とあり、「香玉」のプロットの一部は、恐らくこれにヒントを得たものであろう。

また、牡丹を「妖」とする発想は、唐代からすでにある。『開元天宝遺事』に、

初め木芍薬有りて沈香亭の前に植う。其の花、一日忽ち開き、一枝両頭、朝は則ち深紅、午は則ち深碧、暮は則ち深黄、夜は則ち粉白。昼夜の内、香艶各おの異なれり。帝、左右に謂いて曰く、此れ花木の妖、訝しむに足らざるなり、と。

とあり、牡丹を「花木之妖」としている。また、歴代、牡丹を歌った詩の中でも、「妖」の字を以て牡丹を形容することが少なくない。

こうしてみると、『聊斎志異』の花妖譚は、題材・発想の上では、決して新しいものではない。「葛巾」も「香玉」も、六朝・唐以来の花妖譚のパターンを仮りて物語を構成し、古くから定まった牡丹のイメージにしたがって、牡丹の精を仕立て上げているのである。しかしながら、また、こうした古くからの材料を使いながら、花妖譚を手の込んだ文学作

品として新たに創作していく過程で、「情」「痴」を主題として据えた点においては、両者とも著しく時代性の強い作品であると言える。

「情」「痴」は、明末の一つの典型的な文人精神のあらわれであり、[11] 明清の戯曲や白話小説がしばしば取り上げるテーマであった。『醒世恒言』の「売油郎独占花魁」などは、典型的な情痴の話と言えようし、湯顕祖の『牡丹亭還魂記』の題詞に見える一節、

情は起こる所を知らず、一たび往きて深く、生者は以て死ぬべく、死は以て生くるべし。生きて与に死ぬべからず、死して復た生きるべからざる者は、皆情の至りに非ざるなり。

は、そのまま「香玉」にあてはめることができよう。『聊斎志異』は、戯曲や白話小説で扱うようなテーマを文言小説の中に持ち込んでいるのである。

また、明清時代は、「花痴」を自負する文人の輩出した時代でもあった。[12] 明代の経済発展にともない、花の商品化が飛躍的に拡がったことや、一部の人々の間に享楽主義・耽美主義的な生活態度が延蔓していたことなどが土壌となって、明清は、花の文化がこれまでになく急激に栄えた時代であった。こうした現象は、明清の文人の筆記・小品文などから直接的にうかがい知ることができる。小説の中でも、『醒世恒言』の「灌園叟晩逢仙女」などが、当時の花痴の心態をよく伝えている。

いわば、『聊斎志異』は、旧套を踏襲しながら、新しい時代の思潮を色濃く反映した志怪集であり、その中の花妖譚は、こうした『聊斎志異』の文学的本質を最も端的に具現した実に聊斎らしい作品であると言える。そして、また同時に、花というものが本来的に持つ華美な印象のゆえに、他の異類では醸し出し切れない美的雰囲気に包まれた極めて特殊な

作品であるとも言えよう。

注

(1) 本論中の『聊斎志異』の巻数及び引用文は、張友鶴輯校『聊斎志異会校会注会評本』（中華書局、一九六二年）に従う。

(2) 岡本不二明「『聊斎志異』と菊」（『鹿児島県立短期大学紀要』第三三号）参照。

(3) 『広群芳譜』に、「葛巾紫、花円正而富麗、如世人所戴葛巾状」とある。

(4) 『広群芳譜』に、「玉版白、単葉、長如拍板、色如玉、深檀心」とある。

(5) 欧陽修『洛陽牡丹記』「花釈名」に、「魏花者、千葉肉紅、出於魏相仁溥家。始樵者於寿安山中見之、斫以売魏氏。魏氏池館甚大、伝者云、此花初出時、人有欲閲者、人税十数銭、乃得登舟渡池至花所。魏氏日収十数緡。……銭思公嘗曰、人謂牡丹花王、今姚黄真可爲王、而魏花乃后也」とある。

(6) 『広群芳譜』に、「大凡紅白者多香、紫者香烈而欠清」とある。

(7) 耐冬は常緑の灌木。王士禎『香祖筆記』巻十に、「労山多耐冬花、花色殷紅、冬月始盛開、雪中照曜山谷、彌望皆是。説者謂即南中之山茶、然花不甚大。所云海紅花、是也」とある。

(8) 『広群芳譜』の牡丹の「分花」の項に、「用軽粉加硫黄少許碾為末、加黄土成泥、将根上劈破処擦匀」とあり、「種花」の項に、「用細土拌白歛末種之、隔五寸一枚、下子畢、上加細土一寸」とある。

(9) 「建安二十五年正月、魏武在洛陽起建始殿、伐濯龍樹而血出。又掘徙梨、根傷而血出。魏武悪之、遂寝疾、是月崩。是歳爲魏武黄初元年」（『搜神記』）；「光和七年、陳留済陽・長垣、済陰、東郡、冤句・離狐界中、路辺生草、悉作人状、操持兵弩、牛馬龍蛇鳥獸之形、白黒各如其色、羽毛、頭目、足翅皆備、非但彷彿、像之尤純。旧説曰、近草妖也。是歳有黄巾賊起、漢遂微弱」（『搜神記』）；「唐興平之西、有梁生別墅、其後園有梨樹十余株。太和四年冬十一月、初雪霽、其梨忽有花発、芳而且茂。梁生甚奇之、以爲吉兆。有韋氏謂梁生曰、夫木以春而栄、冬而瘁。固其常矣。焉可謂之吉兆乎。生聞之不悦。後月余、梁生父卒」（『宣室志』）。

(10) 朱一玄『聊斎志異資料匯編』（中州古籍出版社、一九八五年）に、「香玉」の本事として、蔣瑞藻『小説考証』巻七から

取った『労山叢拾』の一節を引いている。

(11) 拙稿「『聊斎志異』の痴について」(「芸文研究」第四八号) 参照。

(12) 合山究「明清時代における愛花者の系譜」(「九州大学教養部文学論輯」第二八号) 参照。